

不安と向き合う人びと

—アンケート調査結果にみる5つの生き方—

HR I 研究部 研究員 鷲尾 梓

誰もが不安を抱える時代

今回の調査では、10年後の生活について不安を感じている人の多さが明らかとなった。不安の要因は性別や年齢、職業など、回答者の属性によつてさまざまであるが、どの層でも多くの人が不安を抱えながら生きていることが示された。また、10年後の社会に関する予測では、多くの側面で悲観的な予測が多数派となっている。

それぞれの「解」を求めて

しかし、転換期のいま、不安や見通しの不透明さを感じるのは、ある意味では当然のことである。これまで自明とされてきたことが自明ではなくなり、「こうすべき」「こうすれば大丈夫」という共通解がなくなる中で、一人ひとりがそれぞれの「解」を見出さなければならなくなってきた。

今回の調査でも、生き方や価値観、未来に関する予測の多様性がさまざまな側面で表れた。

たとえば、未婚者の結婚観や、子どもに対する考え方。かつてのように「結婚し、子どもをもつことが当然」「く歳までに結婚、子どもを」という意識は弱まり、結婚や子どもをもつタイミングが多様化するだけでなく、「結婚しない」「子

どもをもたない」人生を選ぶ人も出てきている（P5、6参照）。

10年後の生活に関する予測では、高齢者の暮らしの場として「自宅」と「施設」とどちらが一般的になっていくのか（P22参照）、子育てをしながら働く夫婦が、託児サービスなどを利用しながら夫婦共にフルタイムで働き続けるのか、あるいは在宅勤務や育児休暇、時間短縮などを利用して夫婦で子育てをしながら働き続けるのか、予測が分かれる結果となっている（P25参照）。

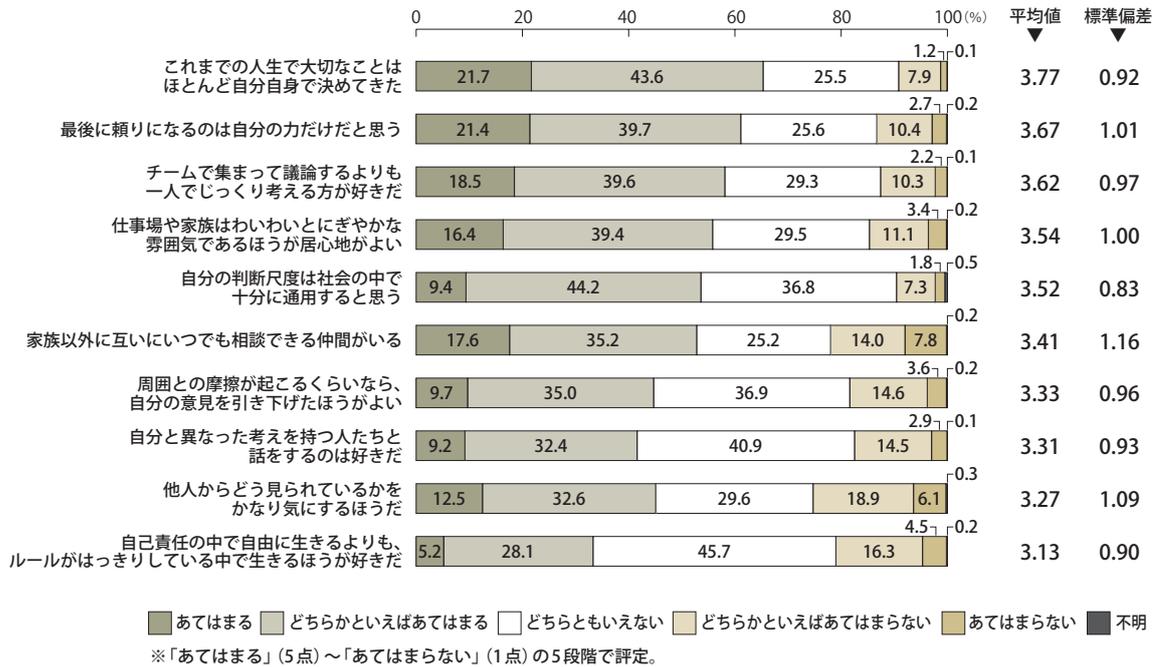
仕事に対する考え方や、仕事と生活のバランスに関する考え方も多様化している。「仕事をいつまで続けたいか」を尋ねた結果では、「何歳になっても、働ける限り働き続けたい」と考える「生涯現役」志向の回答者と、「できるだけ早く退職したい」と考える「悠々自適」志向の回答者が、それぞれ約3割を占めている（P9参照）。仕事と生活のバランスでは、「生活重視派」が7割近くを占める中、少数派ではあるが「仕事重視派」も存在している。「生活重視派」「仕事重視派」に限らず、自分自身が理想とするバランスを実現できている人ほど「現在の生き方の点数」が高いという結果（P7参照）は、満足できる生き方がひとつではなく、一人ひとり異なるものであることを示していると言える。

不安と選択の時代の生き方

一人ひとりがそれぞれの解を見出す生き方は、人生のさまざまなことについて自らの判断基準で決め、その結果に責任を負って生きることを意味する。今回の調査では、「これまでの人生で大切なことはほとんど自分で決めてきた」「最後に頼りになるのは自分の力だけだと思う」とする回答者が6割を超え、選択の時代を主体的に生きる人びとの姿が浮き彫りとなった。時代が求めるこの主体性の強さは、一方で、「他に頼ることはできない」という意識と背中合わせの関係にある。それは、冒頭に述べた今日の「不安」の大きさと、無関係ではないように思われる。

さらに、調査では、「周囲との摩擦が起こるくらいなら自分の意見を引き下げたほうがよい」と、他者との摩擦を厭う回答者が半数近くを占める結果が示されている。生き方の多様化に伴い、生き方や価値観の異なる他者との摩擦の機会が増えれば、摩擦を厭う者同士の関わりはますます希薄なものになっていく可能性がある。

多様な選択肢の中からそれぞれが解を求めていく時代に、一人ひとりの生き方、他者との関わり方はどうあるべきなのだろうか。以下では、今回の調査に盛り込んだ、生き方や人との関わり方に関する



図表1：生き方・考え方に関する項目

10項目を用いて、この点について掘り下げることにする。

関係性の二つの側面

生き方や考え方に関する項目について因子分析を行ったところ、3つの因子が抽出され、それぞれを「独立志向性」「調和志向性」「関係志向性」の因子とした。

○「独立志向性」

「最後に頼りになるのは自分の力だけだと思う」「これまでの人生で大切なことはほとんど自分で決めてきた」のように、主体性の強さ、人生を自ら切り拓いていくという意識の強さを指す。

○「調和志向性」

「他人からどう見られているかをかなり気にするほうだ」「周囲との摩擦が起こるくらいなら、自分の意見を引き下げたほうがよい」「自己責任の中で自由に生きるよりも、ルールがはっきりしている中で生きるほうが好きだ」のように、摩擦を避け、他者に同調することにより、良好な関係を保つことを優先する傾向を指す。

○「関係志向性」

「家族以外に互いにいつでも相談できる仲間がいる」「職場や家族はわいわいとにぎやかな雰囲気であるほうが居心地がよい」

地がよい」「自分と異なった考えをもつ人たちと話をするのは好きだ」のように、他者と接することを好み、自ら積極的に関わっていかうとする傾向を指す。

「調和志向性」と「関係志向性」は、いずれも他者の存在を重視する傾向を示しているが、「調和志向性」は他者との摩擦や関係悪化の回避という、どちらかといえば消極的な動機付けから関係をとらえているのに対し、「関係志向性」は他者との関係を「居心地がよい」「好きだ」と積極的にとらえているという点で、異なっている。

生き方の5タイプ

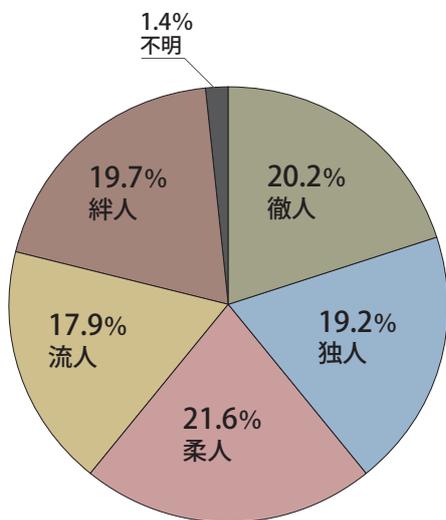
次に、得られた3つの因子の因子得点を用いてクラスター分析(※)を行い、回答者を5つのクラスターに分類した。5つのクラスターは、その特徴に基づいて、「徹人(てつじん)」「独人(どくじん)」「柔人(じゅうじん)」「流人(りゅうじん)」「絆人(きずなじん)」とした。どのクラスターも全体の約2割程度を占めている。それぞれの特徴は次ページに示す通りである。

※クラスター分析とは、複数の観測されたデータ(変数、ケース)の類似度をもとに、いくつかのグループ(クラスター)に分類する多変量解析の手法。

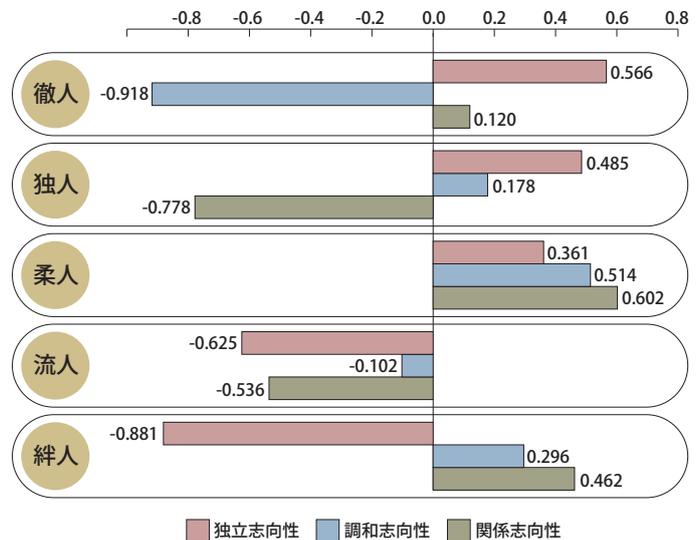
図表2:「生き方」の3因子

| | 因子1 独立志向性 | 因子2 調和志向性 | 因子3 関係志向性 |
|--|--------------|--------------|--------------|
| 最後に頼りになるのは自分の力だけだと思う | 0.688 | 0.100 | -0.101 |
| これまでの人生で大切なことはほとんど自分で決めてきた | 0.560 | -0.084 | 0.135 |
| 他人からどう見られているかをかなり気にするほうだ | -0.042 | 0.575 | 0.029 |
| 周囲との摩擦が起こるくらいなら、自分の意見を引き下げたほうがよい | 0.054 | 0.496 | -0.023 |
| 自己責任の中で自由に生きるよりも、ルールがはっきりしている中で生きるほうが好きだ | 0.019 | 0.465 | 0.029 |
| 家族以外に互いにいつでも相談できる仲間がいる | -0.032 | -0.004 | 0.574 |
| 仕事場や家族はわいわいとにぎやかな雰囲気であるほうが居心地がよい | -0.056 | 0.117 | 0.501 |
| 自分と異なった考えを持つ人たちと話をするのは好きだ | 0.122 | -0.075 | 0.460 |

※最尤法・プロマックス回転による因子分析結果。因子負荷が複数の因子に高い項目については分析から除外した。



図表4: クラスターの構成比



図表3: 「生き方」の3因子に基づくクラスター

絆人

(きずなじん)

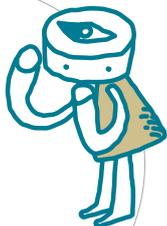


平均年齢38.1歳、男性34.9%

他者と積極的に関わり、良好な関係を保つことを重視する。主体性は全てのグループの中で最も弱い。これまでも、これからも、人生は自ら切り拓いていくものというよりも、他者との関係の中で定まってくものにとらえる。他者を尊重し、他者に頼る側面ももつ、「絆」に生きる人。女性が65%を占め、20代・30代の占める割合が高い。

流人

(りゅうじん)



平均年齢43.3歳、男性53.7%

人生を自ら切り拓いていくという意識が弱く、一方、他者の評価や意見に沿う道を歩もうとする傾向も弱い。他者と関係を結ぶことに対しては後ろ向きである。自分についても他者との関係についても「こうあるべき」「こうしたい」という意識が弱く、これまでも、これからも、流れに身を任せて生きていくことを志向する。年齢構成に目立った特長はなく、女性より男性でやや多い。

徹人

(てっじん)



平均年齢46.2歳、男性57.5%

人生を自ら切り拓いていくという意識が非常に強く、自らの決めた道貫徹する。他者との関わりはもつが、摩擦を気かけたり、その意見や評価にとらわれたりすることは少ない。これまでもこれからも、自らの力でやっていく、やっていけるという意識をもつ人。このタイプは女性より男性でやや多く、50代・60代の占める割合が高い。

独人

(どくじん)



平均年齢44.5歳、男性60.1%

「徹人」同様、主体的な生き方を志向する。他者との関係に対しては極めて消極的で、摩擦を厭い、自ら積極的に関わっていくことはしない。自由を好み、独りでやっていくことを志向するが、「誰が何と言おうと」と言い切る自信に欠け、自己と他者との間で揺れる一面も持っていると言える。男性が6割を占め、年齢では40代・50代の占める割合が高い。

柔人

(じゅうじん)



平均年齢38.5歳、男性44.3%

自分なりの生き方・考え方をもちながら、他者との関係を結ぶことに対しても積極的。他者の評価を気かけ、摩擦を避けようとする傾向も全てのタイプの中で最も強い。若い年代の占める割合が高いことから、自らの生き方・考え方が固まっておらず、他者との関わりの中から最適解を模索していこうとする柔軟な姿が読み取れる。男性より女性でやや多く、20代・30代が多い。

「現在の生き方の点数」と「10年後の不安」

次に、5つのタイプについて「現在の生き方の点数」と「10年後の生活への不安」の2つの側面から比較を行うことで、冒頭で述べた「不安と選択の時代」を生きたヒントを探る。

「現在の生き方の点数」をみると、相対的に「徹人」「柔人」「絆人」の3つのタイプで点数が高く、「独人」「流人」の2つのタイプで低くなっている（図表8参照）。「10年後の生活への不安」も、「不安を感じる」とした回答者の割合に着目すると、「徹人」「絆人」で相対的に不安感が弱く、これに「柔人」が続いている。（図表7参照）

人生を自ら切り拓いていくという意識が最も強い「徹人」と、人との絆に生きる「絆人」。現在の生き方への満足度が高く、将来に不安を感じにくい生き方として、一見対角線上に位置する2つのタイプが浮かび上がってきたのはなぜなのだろうか。

「徹人」という生き方

「徹人」は、5つのタイプの中で「10年後の生活に不安を感じる」とする割合が最も低い生き方である。これまでの人生を主体的に歩んできたという自負があ

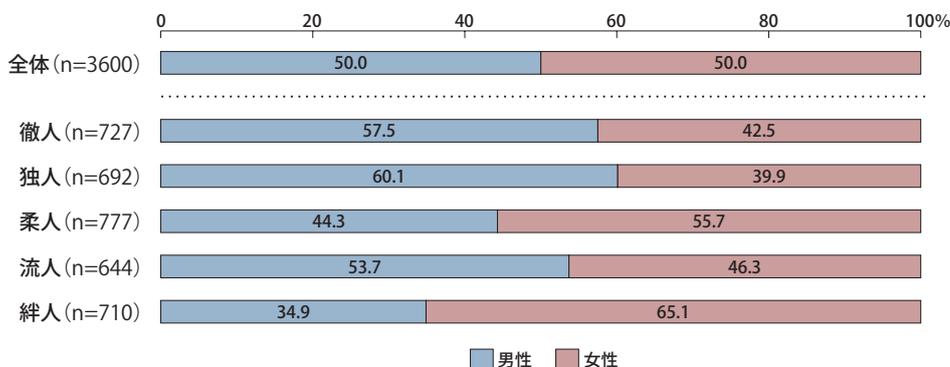
り、これからの人生も、自ら切り拓いていくという覚悟と自信をもっている。このことが、現在の生活への満足度の高さにつながり、将来への不安を感じにくくしていると考えられる。

一方「徹人」と同じく主体性の強い「独人」は、「10年後の生活への不安」が全てのタイプの中で最も強い。「徹人」と「独人」の最も大きな違いは、「徹人」が他者と関わりつつ、その意見や評価にとられないのに対し、「独人」は、そもそも他者と接することに対して後ろ向きであるという点である。「独人」の「他者の意見や評価は関係ない」と言い切れない自信の弱さや、他者との摩擦を生じる煩わしさ、気持ちの余裕のなさや、極力他者と関わらないことを選ばせているように見える。

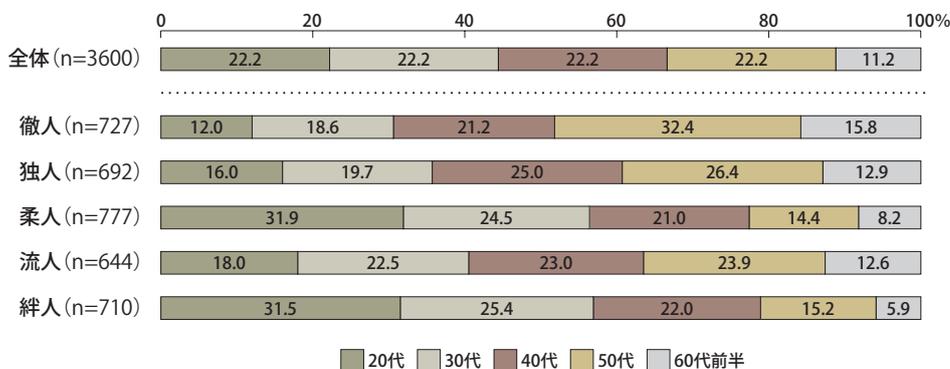
この結果は、「自ら人生を切り拓いていく」という意識は、自らのもつ力への自信によって支えられていながらも、決して他者の存在を切り離すことを前提としていないことを示している。他者と接し、多様な価値観に触れつつも、「自分はこの道を行く」と言える生き方が、「徹人」の生き方が示唆する「不安と選択の時代」を生きるヒントであるとと言える。

「絆人」という生き方

「絆人」の生き方は「徹人」とは対照



図表5：各クラスターの性別構成



図表6：各クラスターの年齢構成

的とも言える生き方であるが、このタイプの将来への不安感は「徹人」に次いで低い。

「徹人」とは異なり、「絆人」の不安感の低さの鍵となっているのは、他者の存在である。「絆人」には、「自ら人生を切り拓いていく」という自信にかわって、「自分は一人ではない」という信念があり、この信念が、将来への不安を感じにくくさせていると考えられる。

「人生は自ら切り拓いていくもの」というよりも、他者との関係の中で定まってくるもの」という考え方は、否定的にとらえれば、主体性を欠いた依存的なものであるとも言える。しかし、肯定的にとらえれば、個人の単位を超えて家族や集団の単位でものごとをとらえる生き方であると言える。この「絆人」の生き方には、一人ひとりが個人の単位で考え、行動したとすれば失われていく可能性のある「絆」をつなぎとめるヒントがあるのではないだろうか。

たとえば、冒頭で触れた「仕事と生活のバランスのあり方」ひとつをとっても、どのような選択をするかは完全に個人の問題ではなく、家族や職場の人びとも関わってくる。家族の構成員の誰もが個人としての選択を優先させれば、家族という単位を維持することは難しくなる。家族に限らず、二人以上の人間が長期的に継続する関係を結ぼうとすれば、それ

は必ず直面する問題である。

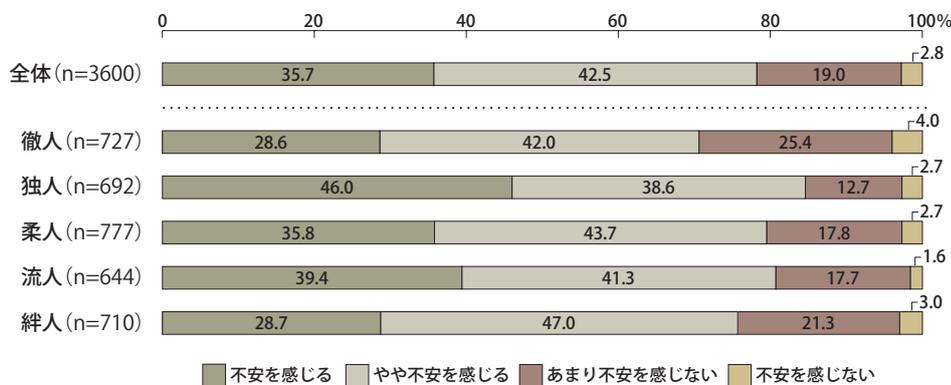
集団の中に「徹人」と「絆人」がいることで関係が保たれることもあれば、場面に応じて立場が入れ替わることもあるだろう。しかしいずれにしても、選択の時代に二人以上の人間が共に生きていくためには、「絆人」のもつ「絆」の視点はなくてはならないものである。

不安の時代の先へ

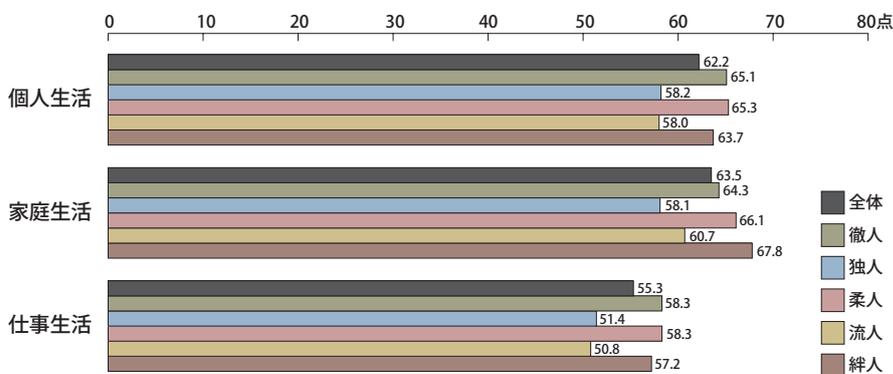
転換期にある時代の「不安」には、「経済的な不安」「健康への不安」のように直接的な要因のほかに、自分の力ではどうすることもできない事態や、これまでの解釈図式では対処できない問題に直面する可能性への漠然とした不安が含まれる。「徹人」の「自ら人生を切り拓いていく」という意識の強さ、「絆人」の個人を超えた単位で物事をとらえる生き方の中には、一人ひとりがそれぞれの解を模索しつつも、相互に孤立しない生き方、社会のあり方へのヒントがあるのでないだろうか。

鷺尾梓（わしおあつさ）

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。2004年4月よりHRI研究員。次世代のための学びの場研究や「てら子屋」事務局、豊かな暮らしをもたらすワークライフバランス等をテーマとした調査研究、国内外での生活価値観調査を担当。



図表7：10年後の生活への不安



図表8：現在の生き方の点数

